特集：CX-3

14

CX-3のデザイン
Design of New CX-3

松田　陽一*1
Youichi　Matsuda

要　約

CX-3のターゲットは先鋭的カスタマーに設定し，彼らの価値観として，自分らしく生きるための独自の指標と本質へのこだわりを持ち，積極的姿勢で人生を生きることを志向し，常に新しい何かを求めるという分析と仮定を行った。彼らの感性をダイレクトに刺激するために，CX-3のデザインが提供する価値は，①彼らのライフスタイルや個性を表現できる，②ジャンル（車型）やクラスにとらわれない自由な発想，③オーナーの予想を超える新しさや美しさの本質を持ったデザイン，を目標とした。この提案により今までのマツダの商品ラインナップにない新たなカスタマーの取り込みと，ブランド表現の幅を広げることを目指した。そのためにデザインテーマ「魂動」を基礎としながら，ハッチバックやSUV等の概念を超えたスタイリッシュで先鋭的な「魂動」の新たな可能性にチャレンジした。エクステリアでは，第一に美しさの基礎であるプロポーションを妥協なく磨き上げ，全身にわたり無駄な要素を徹底的に排除し，その本物感がストレートに伝わるよう取り組んだ。インテリアでも，エクステリアデザインに呼応する造形テーマで空間を造り込み，斬新かつスタイリッシュな世界観を，かつてない素材使いやコンビネーションによるディテールで，より深く追求している。そのことで，これまでのカーインテリアとは明確に異なる，先鋭的な仕上がりの中にも人の手わざの温かみを感じさせる，心地よくも洗練された室内空間を実現した。

Summary

CX-3 targets at forward-thinking customers who value the essence of things, live by their own values, and aspire to live their life with a positive attitude. To get the customers directly and emotionally engaged, CX-3 design was developed to offer the following values: (1) expression of lifestyle and personality of the customers; (2) unconventional ideas not bound by genres and classes; and (3) a design that offers newness and the essence of beauty surpassing owner's expectations. By focusing on these three points, we aimed at acquiring new customers that had never been targeted at by any of Mazda's previous models and also expanding the range of expression of Mazda brand. To this end, we explored a new possibility for a stylish and innovative KODO design beyond the boundaries of segments such as hatchback and SUV. In terms of the exterior design, we put priority on refining the proportion, which is the basis for the beauty, eliminating all excess elements, and conveying its genuine quality straight. As for the interior design, we created an exquisitely detailed interior space in line with the exterior design, and sought for a totally new and stylish view of the world through unprecedented use of materials and their combinations. As a result, a distinctive interior space has been realized that is sophisticated and leading-edge, but warm and comfortable at the same time.

1. はじめに

私たちは，情報とモノが溢れる時代に生きている。求めようとすればWebの情報を駆使して，世界中から最適なモノが選べる時代であり，選択肢は山のように存在する。しかし理想と感じるモノに出会うことは難しく，クルマという複雑な製品ではそれは顕著である。

このような状況下で作り手の立場として，自分たちの純粋な気持ちに立ち返って理想を実現するという開発姿勢を固めた。

*1 デザイン本部
Design Div.

最新の魂動デザインによる，力強く生命感に満ちた彫刻のような造形の中に，既成概念やヒエラルキーに縛られずに，いまの時代を美しく駆け抜けるカタチを現実のモノに，という思いの基，妥協なく造り込んだショーカーの存在感に迫るプロポーションの作りこみと，要素を極限までシンプルにすることで実現した，凛とした表情，徹底したこだわりが生み出す，引き込まれるようなディテールにより，比類ないスタイリッシュな仕上がりを実現した。

2. エクステリアデザイン

2.1　圧倒的なプロポーションと強いスタンス

CX-3のエクステリアデザインにはマツダの新世代商品がそれぞれの個性を最も活かす形で採り入れてきた「魂動」のデザインテーマが，きわめてスタイリッシュな姿で結実している（Fig. 1）。

ひと目見ただけで，実際のサイズを忘れさせるほどの圧倒的な存在感を与えるスタイリングを形づくるのは，まるでショーカーのような存在感のあるプロポーションを，クロスオーバーならではの高さを巧みに利用することで妥協なく取り入れていることによる。ソリッドで分厚いボディーサイドに大径ホイールを組み合わせた力強い下半身と，それとは対照的にタイトで軽快な印象のキャビン，「魂動」デザインに共通するスタンスの良さをリッチなドア断面と，今まで以上にこだわったショートオーバーハング等により更に強調。力強く踏ん張ったスタンスの良いフォルムを実現している。

このプロポーションを構成するキャビンとボディー各部の造形はすべて，緩急の付いたスピード感をもつシャープな表現に統一されており，なおかつ，そのキャラクターの動きがボディーの中で収束することなく，クルマのはるか後方消失点を目指すようにデザインされている。またDピラーをブラックアウトさせて，薄くシャープな造形のグラスエリアがリアで途切れることなくキャビンは後方へと抜けていくような印象を与えた。

このように，塊感のある圧倒的なプロポーションと強いスタンス，そしてサイズを超えてダイナミックに広がる勢いのある表現を，量産車においても妥協なく追求したことで，新ジャンルにふさわしい，比類のないスタイリッシュなアピアランスを生みだすことができた。

Fig. 1　Exterior View

2.2　進化した魂動デザイン

エクステリアスタイリングでは，魂動デザインのDNAである生命感のあるダイナミックな動きの表現を更に研ぎ澄ますイメージで進化させ，シャープさとスピード感を高めた造形とすることで，より強い意思を持った動きの表現を追求した。そして余計なディテール表現を極力排除して，シンプルながらも表情豊かな造形を心がけた。基本のテーマは，長く伸びたフロントノーズの先端からリアフェンダーへ向かう伸びやかな塊と，力を包み込んだような強さを感じさせるリア周りの塊，そしてAピラーを後ろへ引き，Dピラーをブラックアウトとしたスリークなキャビンという3つの基本要素に絞り込み，その上で，それぞれの塊を緊張感のあるエネルギッシュな基本の面で構築している（Fig. 2，3）。

この三つの塊はシンプルながら，非常にデリケートに刻々と移り変わる表情をもった面質を備えている。そしてそれらをつなぐ面を更にドラマチックに変化させ，その間に生まれる稜線を鮮やかに際立たせた。こうして生まれたCX-3のボディー造形は，シンプルでシャープなイメージのなかに，変化に富んで深みのある表情を創出することができた。そしてこの表情は，人の手仕事による入念な造り込みによる，魂動デザイン特有の技によって創りだした。

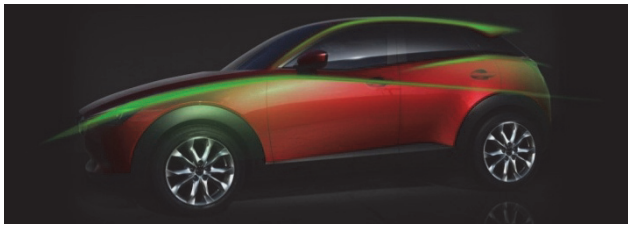

Fig. 2　Design Theme

Fig. 3　Fundamental Element

2.3　フロントデザイン

CX-3は，マツダブランドを強く訴求しながらも，スタイリッシュなプロポーションに相応しい精悍で新しい表情を与えることを目指した（Fig. 4）。

クロスオーバーの車高の高さを活かし，フロントノーズは通常のパッセンジャーカーより高く設定し，ボリューム感のある自信に満ちた佇まいにした。フロントグリルには７本のフィンがあり，先端をシルバー塗装（ハイグレードのみ）にしたことで，マツダシンボルから横方向へと密度をもって広がるエネルギーと，精緻な造り込みを感じさせている。ライセンスプレートはロア開口部（グリル外）に置かれ，グリルの精緻で力強い印象を損なうことがないようこだわった，新世代商品の証であるシグネチャーウイングは，削り出された金属の強さをイメージし，全身に漲るスピード感のスタートポイントとして骨太かつ立体的に造形した。そのシャープなラインはスリークなLEDヘッドランプに一体化し，夜間にはランプ内のライティングシグネチャーと直線的につながって強烈に個性を主張している。

Fig. 4　Front View

2.4　ボディーデザイン

新世代モデルに共通の，大きく後退したAピラー位置に加え，通常はタイヤセンターの真上に置くフロントフェンダーの頂点をAピラーの付け根にまで後退させたことで，力強く伸びやかなボンネットのシルエットを創りだし，前へと進むスピード感を強調している。またAピラーは付け根部分が細く上へ行くほど太くなる形状として，キャビン外観に軽快感を与えている。

Dピラーはウインドウと一体感のあるブラックとし，ルーフサイドラインの動きを止めることなくボディー後方へ解放することで，伸びやかさをより強めた。またドアミラーの直後を境として，緩やかなV字を描いて後方へ駆け上がるベルトラインにより，グリルから始まってリアオーナメントまで突き抜ける，クルマ全体の動きの軸を構築した。同時に，リアクォーターウインドウにより，タイトなキャビンのイメージと優れた視界を絶妙なバランスで両立させた。

サイドビューを構成するキャラクターラインと，面造形の断面形状はすべて，始点では鋭く立ち上がり，ピークを過ぎると撓めた力を穏やかかつスムーズに開放するような，緩急をつけたスピードの表現で統一した。その余韻をボディーの外にまでつなげるイメージでデザインすることで，実際のサイズ感を圧倒的に上回る伸びやかさを演出した。更に，前後フェンダーとサイドシルのブラックのガーニッシュとボディーカラーとの対比によって，その前後方向への伸びやかさをより一層強調している（Fig. 5）。

Fig. 5　Side View

2.5　リアデザイン

通常リフトゲートもしくはバンパー下端に配置されることの多いライセンスプレートを，リフトゲートと同色のバンパー上部にリセスを設けて配置し，立体的かつすっきりとしたリフゲート面と，非常に短いイメージのリアオーバーハングを実現した。またライセンスプレートの取り付け段差を利用し，カメラやスイッチ等のリフトゲートに求められる機能部品のすべてを視線から隠れる所にレイアウトした。ゲート面とバンパー面とのパーティング段差を2mm以内に抑えるという高精度な仕上げ品質と相まって，連続感とクリーンな印象が際立つリアエンドデザインを実現した。エグゾーストパイプは左右2本出しとして，力強さとスポーティさを強調し，更に，ブラックアウトしたDピラーによってサイドウインドウからバックウインドウへのつながりを持たせ，キャビンをガラスで包み込むような造形としたことで，Dピラーの存在感を消したキャビンの抜けの良いイメージを際立たせている。こうした造形と，ボディーサイドから連なるショルダーをしっかり感じさせるボリューム感によって，他に類のない圧倒的な塊感と力強いスタンスを感じさせるリアビューを造り上げた。

Fig. 6　Rear View

2.6　LEDランプ類

CX-3ではヘッドランプ，フォグランプ，リアコンビネーションランプにLEDを採用し，先進的なイメージをより高めている。フォグランプへのLED採用はマツダ車で初めて（同じタイミング）採用した。

フロントエンドでは，彼方の獲物を見据える獣の眼光鋭い瞳をイメージした薄くシャープなヘッドランプ形状を実現するため，ターンランプをヘッドランプユニットではなく，フォグランプとともに下部のコンビネーションランプユニットに配置した。

ハイグレードモデルのヘッドランプは，ハイビーム2灯・ロービーム2灯の4灯をすべてLEDとし，ハイビームを小型化して灯体の存在感を消すようにデザイン。グリルから連なり，ランプユニットに溶け込むシグネチャーウイングと相まってよりシンプルで鋭い印象を際立たせている。ランプ内に連なるシグネチャーウイングにはLED発光のレンズを一体化。導光技術によってロービーム周囲のライティングシグネチャーとシームレスにつなげることで，先進的かつ知的な表情を造り上げた。スタンダードグレードのヘッドランプは，同じ薄くタイトなユニットにハロゲン4灯を収めている。スタンダードグレードにはライティングシグネチャーは採用されないが，クローム処理によるシグネチャー表現やポジションランプのインナーレンズ等により，シンプルでクオリティー感の高い表現ができた。

またターンランプとフォグランプを収めたフロント下部のコンビネーションランプユニットは，フォグランプのLED化で実現した細く縦長のユニークなベゼル形状をもち，サイドから見ると前傾によるスピード感を，正面視ではハの字型の力強いスタンスを表現した（Fig. 7）。

Fig. 7　Lamp Design (Front)

リアエンドでは，リッドランプの採用と，リフレクター／フォグランプ／サイドRR等（仕向けにより機能が変わる）の機能を一体化して，バンパー部へ分離させることで，ヘッドランプと同じく薄くシャープな横長のリアコンビネーションランプ形状を実現した。導光技術によるランプ上部の光るラインと，立体感のあるテール／ストップランプを組み合わせた発光シグネチャーとすることで，しっかりとした記号性を持たせ，マツダの個性を際立たせる印象的な後ろ姿を創り上げている（Fig. 8）。

Fig. 8　Lamp Design (Rear)

2.7　ホイール

クロスオーバーならではの力強い走りを予感させる大径のタイヤを採用し，18インチと16インチの2種類のアルミホイールを設定した（Fig. 9）。

18インチホイールには，生命感を感じるひねりを加えたガンメタリック塗装の太いスポークによる，立体的な造形を採用し，その断面の先端部分に大胆な切削加工を施し，本物の金属ならではの輝きとガンメタリック塗装との，鋭くエッジの効いたコントラストによって独自の個性を造り上げた。

16インチホイールには，実サイズよりも大きく見せる彫刻的な印象のデザインを採りいれた。彫りの深さや軽量化はもちろん，リム断面も数mm単位でこだわり抜き，質感高く造り込むことで，16インチながらもシンプルかつ大胆なスタイリングの実現に大きく貢献している。

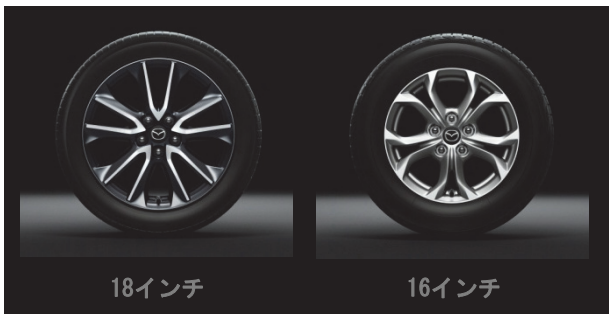

Fig. 9　Wheel Design

2.8　サイドガーニッシュ

大径タイヤの力強さを強調する，幅広の前後ホイールアーチモールをブラックとして，ボディーサイド下部にはそれをつなぐ大胆なブラックサイドガーニッシュを採用。ボディーカラー部とのコントラストにより，前後への伸びやかさを感じさせる効果をより一層強調した。ガーニッシュの上端キャラクターはリアドアの中程へ向かってキックアップした後，リアホイールアーチに向かってキックダウンする意匠を与え，全体の動きの躍動感をサポートしている。

更にハイグレードモデルでは，サイドシルガーニッシュの高輝度シルバー塗装のブライトモールディングを通し，スピード感とクオリティー感を高めている（Fig. 10）。

Fig. 10　Side Garnish Design

2.9　キャビン

キャビンはピラー類をすべてブラックとし，ウインドウを連続したガラス面に見せている。特に最後部ではブラックのドアサッシュとDピラーガーニッシュを設定。段差を極力少なくするパーツ構成や見せ方に留意しフラッシュな印象に仕上げ，リフトゲートウインドウまで滑らかにつながるようにしたことで，「後方へと抜けて行く開放的で伸びやかな動き」を強く感じさせている。またベルトラインがリアフェンダーのピークへ向かって上昇するのに対し，ルーフラインをDピラーの上で少し下降させてリアフェンダーへの塊をフォローするイメージのアクセントをつけ，塊のまとまり感も演出した。これは同時に単調になりがちな6ライトウインドウのグラフィックに，リズムを持たせるという効果も持たせている（Fig. 11）。

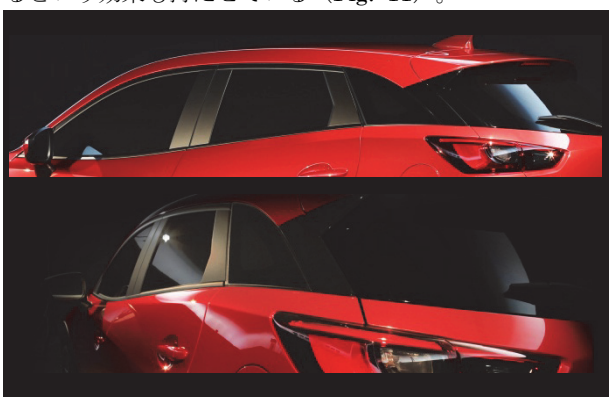

Fig. 11　Cabin Design

3. インテリアデザイン

3.1　心地よくスタイリッシュなインテリア

CX-3の室内空間の基本構造は，プラットフォームを同じくするデミオと多くのパーツやインナーモジュールを共有している。例えばインストルメントパネルは，CX-3とデミオそれぞれのインテリアデザインの要求をともに満たすことができるカウル（インパネ前端部）高さを決定するまで，双方のデザイナーが検討を重ねて最善の解を追求して造り上げたものだ。そうした基本構造の諸元をベースとしながら，CX-3では斬新なエクステリアデザインに呼応する独自の世界観を表した，新ジャンルにふさわしい先鋭的なインテリアデザインの創造を目指した。

エクステリアに呼応する先鋭的な造形と手造りの質感という相反する要素のコントラストを活かし，これまでにないスタイリッシュさの実現を，デザイン開発のテーマとした。室内の造形はエクステリア同様にシンプルでスピード感のある動きの表現に統一し，伸びの良さと連続性を追求。同時に，既成のコーディネートの概念にとらわれず，色や素材の選択は内装パッケージごとに徹底的に吟味し，視覚にも触覚にも上質で心地よく感じられるよう，クラフトマンシップにあふれた仕立てに注力した（Fig. 12）。

Fig. 12　Interior Overall View

3.2　包まれ感と解放感を融合した空間

インパネからドアトリムへのラウンドなつながりを生むキャラクターラインと高めのベルトラインにより，ほどよい包まれ感を乗員に提供。ドアサイドのエリアでは，分厚いドア断面を活かした彫りの深い立体造形で動きを表現しながら，その上部のグラスエリアでは視覚的にも広さを感じる空間造形を図り，心地よさを高めている。ドライビングに必要な視界はもちろん，6ライトのキャビンならではの開放感を活かし切るため，視認性を高めながら視覚的な圧迫感を排除したピラートリムの造形や，トップシーリングとC・Dピラーの色を合わせることで生まれる視覚効果などを採り入れ，エクステリアのキャビンデザインに呼応した，抜けの良い空間イメージを創り上げている（Fig. 13）。

Fig. 13　Cabin Design

3.3　前席空間デザイン

コックピットには新世代モデルに共通の，ドライバーが走りを楽しむことに集中できるドライバーオリエンテッドな空間を追求。マツダのヒューマンマシンインターフェイス（HMI）思想「Heads-up Cockpit」のコンセプトに基づき，ドライバーを中心にメーターやディスプレイ，コマンダーコントロールなどを適切に配置している。助手席側では，横方向への広がり感を際立たせるデコレーションパネルに，ステッチを施したソフトパッドを採用。この横への広がりを，インストルメントパネル端の丸型エアコンルーバーを経て，ドアトリムの印象的な金属調加飾へと連続させることで，前席空間の一体感を更に強調している（Fig. 14）。

Fig. 14　Front Seat Space Design

3.4　インストルメントパネル／コンソールデザイン

アクセラから採用している単眼アナログメーターと両翼のデジタルメーターを組み合わせたメーターセットと，デミオにも採用した三つの丸型空調ルーバーと中央の薄型空調ルーバーをCX-3にも採用し，またハイグレードモデルではダッシュボード上の7インチ液晶センターディスプレイとメーターフード上のアクティブドライビングディスプレイを搭載。安全を最優先にすべての乗員がわくわくする走りを楽しめる，クルマとの一体感を高めるキャビン空間を造った。

ハイグレード用アクティブドライビングディスプレイ付きメーターフードはCX-3のための専用デザインとし，二層インジェクションを用いて成型した，質感表現にこだわった表皮構造とした。フードの前縁に入れた成型ステッチのリアリティーにも最新の注意を払い，縫いの立体的なディテールを実際の革の縫い仕上げの３Dスキャンデータを元にイメージを再現。こうした造り込みにより，大人の雰囲気が漂うメーターフードを完成した。更に，ハイグレードのコンソールシフトブーツには，周辺のアクセントとコーディネートを取ったダークレッドのストライプを配する造り込みをした（Fig. 15）。

Fig. 15　Instrument Panel and Console Design

3.5　ドアトリムデザイン

ドアトリムでは，インパネからのなだらかな流れが，後方に向かって解き放たれるように加速していくダイナミックな動きを表現するため，前後ドアそれぞれに上方へ向かうキャラクターラインを採用。面造形では，ウインドウのすぐ下で切り返されるラインやアームレストの上面に外光が当たるときの，光の入り方や反射の仕方にまで注目した。トリムのボリュームと面質に微妙な変化を織り込み，トリムのみならず周囲の空間にまで動きを感じさせるイメージで，心地よさとダイナミックさを同居させている。

隣接する丸型エアコンルーバーとの組み合わせを重視して綿密に造り込んだ，印象的なインナーハンドルベゼルは，金属を削り出したかのようなシャープで先鋭的なイメージで造形し，更にレザー内装のモデルには，インナーハンドルベゼルに緻密な切削加工を彷彿とさせるヘアライン処理を施すなど，徹底したこだわりを注ぎ込んで仕上げた。ドアマウントスイッチベゼルには，革質感のパネルでスイッチパネルを包み込むようにするパネル合わせを採用し，タイトさと品質感を表現した。またアームレストにはフロアコンソールのニーパッドとコーディネートした，ステッチ付きのソフトパッドを採用。こうした造り込みによって，ドアを開いた瞬間に車格を超えた品質感とエモーショナルな空間を予感させる，先鋭的なドアトリムデザインを実現した（Fig. 16）。

Fig. 16　Door Trim Design

3.6　シートデザイン

デミオのハイバージョン（レザー仕様）の基本形状を全グレードに採用した（基本構造はデミオ／CX-3何れもアクセラを踏襲）。個性と上質な造り込みをともに感じさせるデザインを実現した。

レザーシートは，センター部にラックススエードを採用するコンビネーションとし，スポーティな中にも高い質感も待たせている。素材の切り替わるきわには，スタイリッシュなアクセントとなる新開発のソフトなパイピングをあしらい，更にセンター部表面に縫製仕上げを施して，立体感と素材の表情の豊かさを強調。後席にも同じ素材遣いとパイピング，縫製仕上げを採用して全体への造り込みに配慮している。レザレット仕様のセンター部とファブリックシートには，艶の見せ方に徹底的に注力して開発したセミマットな布地を採用し，柄ではなく精緻な素材感がもたらす魅力によって全く新しい質感を実現。このシートでもセンター部に縫製仕上げを施して，素材の持つ絶妙な艶による素材感を一層引き立てている（Fig. 17）。

Fig. 17　Seat Design

4. カラーデザイン

4.1　ボディーカラー

CX-3のスタイリッシュなエクステリアの造形をより際立たせるボディーカラー全9色を設定した（国内8色）。

このモデルで新規開発したCeramic Metallicは，研ぎ澄まされた金属感や緻密な硬質感を表現し，光によって表情が変化する，まったく新しい質感表現にこだわって造り上げたボディーカラーである。通常時はソリッドな雰囲気でキャラクターラインをシャープに強調し，エッジの効いたクールさを醸成した。そして明るい環境下では，ハイライトの鋭く白い艶やかな輝きによって，未来的な表情を造り出している（Fig. 18）。

Fig. 18　Body Color of Ceramic Metallic

他には新世代商品共通のプロダクトブランドカラーSoul Red Metallicをはじめ，Arctic White，Jet Black，Dark Crystal Blue，Meteor Grey，Titanium Flash，Dynamic Blue，White Pearlをラインアップし，個性的なテイストを求めるカスタマーの多様な要望に応えるワイドなカラーバリエーションとしている（Fig. 19）。

Fig. 19　Body Color

4.2　インテリアカラー

このクルマの先鋭的なスタイリッシュさと，オーセンティックな造り込みの味わいをともにサポートするような色の遣い方を実現し，さまざまな内装素材の質感を最大に活かすことに注力した。ブラック基調のインテリアに，フロアコンソールのニーパッドやシフトブーツのステッチ，ドアトリムアームレストなどに印象的なアクセントカラーを用い，主要なパーツをピアノブラックとメタリック系の加飾に統一し，新鮮かつハイクオリティーな要素を加えている。CX-3には以下に挙げる三つの内装コーディネーションを設定している。

（1）x Future（クロスフューチャー）

最上級仕様となるx Futureでは，シートのメイン素材とインパネ加飾パネルに新開発のピュアホワイトレザーを，シートセンター部には上質なオフブラックのラックススエードを用い，スタイリッシュで洗練された雰囲気を醸成した。アクセントカラーには新開発の，やや青みがかったダ

ークレッドの素材を大胆にあしらい，メタリックパネル部分にはアルミを削り出したようなヘアライン調の加飾を採用した。これらにより，ターゲットカスタマーの感性に訴えかける一歩先を行く新しさと造り込みを表現している（Fig. 20）。

Fig. 20　x Future

（2）x Performance Mode（クロスパフォーマンスモード）

シートのメイン素材はブラックのレザレットとし，センター部にダークグレイの精緻なイメージの新開発ファブリックを用いて，x Futureと同じダークレドのアクセントカラーを効果的に配している。これらにより，一般的なストイックなスポーティな世界とは一味違う，スタイリッシュさとスポーティさの融合した新しいイメージを創り上げている（Fig. 21）。

Fig. 21　x Performance Mode

（3）x Edge Mode（クロスエッジ—モード）

量販グレードにありがちな単調な「黒一色」のコーディネーションを脱却し，グレイを効果的に使った新しいモノトーンコーディネーションの創造に取り組んだ。シートセンター部にはx Performance Modeと同じファブリックを採用，メイン素材をブラック，センター部をダークグレイとして，シルバーアクセントできわを引き締めたクールでスタイリッシュな雰囲気を生み出している。またインパネの加飾パネルにはブラックのステッチ仕上げのソフトパッドをこのグレードにまで展開して質感の高さを表現している。更にこのコーディネーションでは，丸型空調ルーバーのリングを上位グレードと共通の深みのあるメタリックレッドとしてモノトーンの中にスパイスを利かせ，シンプルなダークスーツをスタイリッシュに着こなすような知的なテイストを醸し出している（Fig. 22）。

Fig. 22　x Edge Mode

5. おわりに

Bセグメントのコンパクトクロスオーバーというカテゴリーは，開発当初は市場での圧倒的成功事例のない新しい領域であり，CX-3はそこにブランニューのカーネームとして新しい価値を訴求していくプロダクトとして企画された。新しいターゲットカスタマーの好奇心と日常的ライフスタイルに応えるべく，通常の乗用車でもなく典型的なSUVでもない，またそれぞれの要素を混ぜるのでもない，新しい発想で新しい存在感をこのデザインで示すということを，CX-3における「クロスオーバー」という言葉の解釈とした。発想の転換を求められる難しい課題ではあったが，このターゲットの姿はまさにクリエイターである私たち自身にも重なり，プロジェクトが目標とすることは，つまり自分たちの欲求に答えることでもあった。

積極的姿勢で人生を生きることを志向し，常に新しい何かを求めたいという思いは，先鋭的カスタマー特有の価値観ではなく，誰の心の中にもある，ひとつの感情であり，そうありたいという姿でもある。CX-3のデザインは，本質的な美しさと現代的感覚をストレートにまとめ上げることに取り組み，それは多くのカスタマーに直観として伝わるレベルが実現できたと確信している。CX-3のデザインを通して今の時代を生きる多くのカスタマーと私たちの想いを共有できたら幸いである。

■著　者■

松田　陽一